

2024年2月26日 日本テレビ 定例記者会見

《 要旨 》

1. 営業状況

・ 放送収入

タイムはレギュラーセールス・単発番組、共に前年比に届かなかったが、スポットの売り上げは在京5局を通じて、1月単月の最高売り上げを記録した。

2月、3月、年度末までセールスが続いていくが、この勢いをキープしながら、通年通期で積み上げていきたい。

・ 放送外収入

3月15日(金)公開の映画「恋わずらいのエリー」は、フレッシュにして非常に実力派の若手俳優・宮世琉弥さんと原菜乃華さんが出演する胸キュン・ラブストーリーとなっている。

イベントは昨年11月からのロングランとなった、日本テレビ開局70年記念舞台「西遊記」と、明石家さんまさんにご出演頂いた「斑鳩の王子 -戯史 聖徳太子伝-」は大好評の中、無事終了した。

またIPビジネスが取り組んでいる音楽ライブイベント「BEAT AX」「RUN! RUN! RAMPAGE!!」も集客が非常に好調だった。

2. 質疑他

Q. 「セクシー田中さん」の原作者・芦原妃名子さんがご逝去されたことに対する、一連の受け止めについて

A. まず、芦原妃名子さんに哀悼の意を表しますとともに、ご家族の皆様にご心よりお悔やみ申し上げます。

今回の事態については極めて厳粛に受け止めており、外部の有識者に入っていたき、社内特別調査チームを発足した。メンバーの詳細については本日のリリースに記載している。

すでに調査チームでヒアリングに入っているが、速やかに調査を進め、真摯に検証し、全ての原作者、脚本家、番組制作者等の皆様が、より一層安心して制作に臨める体制の構築に努めていきたい。

Q. 事実関係や経緯、今後の発信予定について

A. お伝えすべき最小限のことについては、すでにホームページ等で情報発信しているが、改めて客観的に経緯を検証し、どこに問題があったのか、調査する必要がある。

外部有識者に加わっていただいた社内特別チームを発足し、小学館にも協力いただき、調査を行う。

原作者によって、映像化をどう展開していくか、考え方はさまざまであると承知しており、脚本家の方もどう向き合ってコンテンツの脚本化に努められるか、このワークフローは非常に多様性のあるものと思っている。それらを踏まえた上で、経緯を客観的に調査し、教訓になるものを見つけだし、再発防止に生かしていきたい。

ヒアリングから浮き上がってくる調査の結果、公表すべきことについては、可及的速やかに、適切な時期にお伝えする。

Q. 社内特別調査チームの社内メンバーと調査方法について

A. 現在、外部の弁護士ら2名と調査を始めている。社内メンバーは、広報・総務・コンプライアンス担当取締役兼コンプライアンス推進室長を中心に、コンプライアンス推進室等のメンバーで構成している。

ヒアリングは法務部・考査部・その他のメンバーで手分けをしながら進めていく。今回は中心メンバーを公表したが、社内顧問弁護士の谷田先生は、非常に多くの事案を対処されている。客観性を持ったうえで、なおかつモノづくりにご理解がある方なので入って頂いた。小学館さんには調査に協力していただけることになっている。

特別調査チーム始動までに2週間余り要したが、個人攻撃など、いろいろな形で情報が飛び交っていたため、発信そのものを少し落ち着くまで控えていた。

Q. 原作者と脚本家の主張が異なっていることについて

A. 現在、特別チームでの調査を進めているため、制作の経緯など、詳細を申し上げるのは控えさせていただく。

原作者の方も脚本家の方も、SNSでご意見を公表されている。その影響があったのかどうか、我々だけではどう見るべきか推し量れない。調査では、アドバイスや見識・意見をいただきながら、総合的に事実を迫り、次に向けた建設的な報告をまとめていきたい。

Q. ドラマ制作の現状について

A. ドラマ枠が増え、制作本数も増えており、外のカも借りながら適切な対応を取り、増員が必要であれば増員をしていくというところに取り掛かっている最中である。

今回の件では、例えばコミュニケーション不足や、人が足りていなかったのではないかとすることは想像できる。こうした点についても、社内特別調査チームが調査すると考えている。現場では懸命にドラマ10話を制作するため、努力を重ねていたということ、ご理解いただけるとありがたい。

Q. 過去、原作者とトラブルが起きた作品があったかどうかについて

A. 作品を映像化していく過程の中で、双方の意見の食い違いや、それを埋めていく作業は起こることがある。全く何もないこともあるが、そうでないことも過去にはあった。

原作者の方がいらっしゃる作品の映像化について、今までのやり方でこのようなことが起きてしまったので、今後そのようなことがないようにしていかなければならないという責任を感じている。

Q. 4月期小学館の漫画原作ドラマの見送りについて

A. 「セクシー田中さん」の事案が前提にあり、4月期ドラマについて検討を進めた結果、予定していた作品を変える決心に至った。出演予定者の皆様には丁寧にご説明し、お詫びしている状況。本当に申し訳ないと思っている。

4月期の当該枠で何を放送するかについては、現在検討中となっている。

Q. 24時間テレビの募金が、日本海テレビの元社員によって着服された件についての受け止め

- A. 大切にお預かりした寄付金の着服は言語道断で許されることではなく、今回の事案は誠に遺憾である。24時間テレビを制作・放送している当社としても、寄付をしてくださった皆様、番組やチャリティー事業に関わってくださった皆様、スポンサー各社の皆様、並びに視聴者の皆様に対し、心よりお詫び申し上げます。

2月1日のリリースでご案内のとおり、24時間テレビチャリティー委員会では、外部識者を交えた検討チームと共同で、昨年の日本海テレビジョンの寄付金着服をうけて再発防止策を策定した。

また、2月17日は特別番組を放送し、寄付金がどのように使われているか、再発防止策の詳細についてお伝えした。一つ一つ丁寧な対応をしながら、皆様の信頼を回復できるよう努めていきたい。

Q. 17日(土)に放送された「24時間テレビ特別番組 チャリティーの歩みと今後の募金活動」の放送について

- A. 24時間テレビの運営をしている31社の地域、全てで放送は終了しており、現在は24時間テレビチャリティー委員会のホームページで閲覧できる。

この番組を放送した意図は2つあり、一つ目は24時間テレビチャリティー委員会の活動について、より知ってもらいたいという点、二つ目は、今回の不正を受け、再発防止策の内容について皆様にお伝えする、という目的をもって放送した。

この放送で終わりということではなく、「24時間テレビ不正通報窓口」を2ヵ月間設け、24時間テレビの運営に関わった方や31社の社員スタッフから通報を受け付けるほか「募金活動のモニタリング調査」など、今後も再発防止活動を継続し、皆様の信頼を回復すべく、今後も引き続き取り組んでいく。

Q. 今年の24時間テレビの放送について

- A. 番組編成については、お伝えできる段階になったところで、速やかにお知らせする。

Q. 旧ジャニーズ事務所（現SMILE-UP. 社）のタレント新規起用について

- A. SMILE-UP. 社の取り組み・進捗を注視しながら、適切に判断していくというスタンスに変更はない。

我々が申し入れた点についてはしっかりと対応して頂いており、昨年11月に比べると、新規起用も検討できる段階になってきたと判断している。昨年9月に、当社から当時のジャニーズ事務所社長に対し「被害者への適切な補償」「再発防止策の実施」「所属タレントへのマネジメント体制の構築」などに加え、「社名の変更」「補償会社とマネジメント会社の分離」などを具体的に申し入れ、それ以降、何度か対話を行ってきた。

昨年12月には、STARTO ENTERTAINMENT社の福田社長ら新経営陣が来社され、社の経営体制や資本関係などの進捗状況について説明を受けている。すでに発表されている点も含め、我々が申し入れた点についてはしっかりと対応して頂いていると認識している。また、SMILE-UP. 社が行っている補償についても、2月15日時点で補償合意者246人、補償支払い者201人と進捗していると聞いている。従って11月と比較すると状況は進んでいると判断、4月以降の新規起用の検討段階に入っている。

4月以降のキャスティングについては、まだ発表のタイミングを迎えていない

め、他の番組同様、差し控えさせていただく。

この件では、人権に関して議論・認識をより一層深めていこうという方向性になり、日本テレビも人権方針を策定・公表した。様々な角度から人権上のあらゆる差別をなくしていこうと理解も深まり、実効性も高まりつつあると感じている。

Q. ダウンタウン・松本人志さんに関する受け止めについて

A. 番組対応については、活動休止されてから新たな制作には関わっておらず、出演のない状況が続いている。受け止め方については裁判係争中の事案ということで、コメントは差し控えたい。成り行きに注視している状況である。

吉本興業の岡本社長には日本テレビの人権方針をご説明し、これに基づいた対応をぜひとも進めていただきたいと直接申し上げ、岡本社長からもご承諾いただいている。

(了)

石澤 顕	代表取締役社長執行役員
福田 博之	取締役専務執行役員
於保 浩之	取締役専務執行役員
澤 桂一	取締役執行役員